

学校教育におけるダンス・アウトリーチ活動に関する研究:コーディネーターの役割に注目して

中西みなみ(早稲田大学スポーツ科学研究センター)
岡田悠佑(明治学院大学心理学部教育発達学科)

1. 背景・目的

日本における「アウトリーチ」は1990年代後半から音楽や芸術の分野を中心として広まった(岡田他, 2018)。現在では、学校教育等をはじめ様々に展開され、ダンスに関してもその効果が示されている(河合, 2014)。一方で、課題も見受けられる。岡田他 2018 は現場のリソース不足や講師とのコミュニケーションの難しさを挙げている。中でも授業を外部講師に丸投げしているという指摘は、当該活動の意義を問うものであろう。

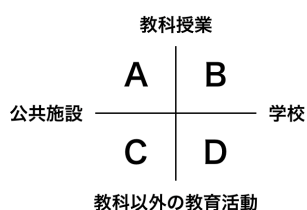
本研究は、学校教育において行われるダンス・アウトリーチ活動に特化する。まず先行研究で指摘されている課題を確認する。その上で、本研究の目的として関係者へのヒアリングにより、コーディネーター業務にみる現状を明らかにする。

2. 先行研究における課題の確認

先行研究には、指導者と参加者に着目したものが多く、特に前者については進行を担うファシリテーターとプログラムを提供する指導者の双方の視点から考察するものがみられる。学校教育においてアウトリーチ活動を実施するに当たっては、コーディネーターの役割を指導者或いは学校、もしくは第三者が担う。しかし誰がこれを担うのかという課題があり、またその役割も明確に理解されているのか不明である。

近年学校教育において行われているダンス・アウトリーチ活動は、図のA~Dの4つの区分に分けることができる(下図参照、筆者作成)。ダンス・アウトリーチ活動の普及には、公共施設の増加とダンス必修化が大きく関わるものと考えられ、特に学校教育においては教員の関与が関わってくる。以上から、学校教育におけるダンス・アウトリーチ活動に関し、コーディネーターの業務を確認し、その現状を見つめることが求められる。

【図】



3. コーディネーター業務にみる現状

3-1. 調査方法

学校現場にアーティストを派遣する取り組みを20年以上行っている団体においてコーディネーターの役割を担う職員に、半構造化インタビューを行った。

3-2. 結果と考察

コーディネーター業務とそのプロセスにおける現状は、以下の通りである。

① 実施対象校の選定

アーティストの派遣を希望する学校を毎年公募し、その中から実施校を選定する。コーディネーター側もリソースが限られており、活動の質を担保するため実施校を制限するものと思われる。

② 実施対象校へのヒアリング

実施対象校の抱えている課題や希望プログラムについてヒアリングを行う。そして当該学校の状況と課題を把握し、その解決という観点から派遣するアーティストと活動内容を決定する。これは実施対象校の課題解決を派遣事業の一環として捉えていることによるものと思われる。

③ アーティストの選定

派遣するアーティストは募集せず、自ら探し出してオファーするが、ファシリテーターの役割よりも、独自のプログラムの提供をアーティストに求める。これは学校教育におけるアウトリーチ活動で求められる役割を示すものと言える。

4. おわりに

先行研究より、コーディネーターの業務を確認し、その現状を見つめる必要性のあることがわかった。また、以下のことが明らかになった。

- 1) リソースの制約と活動の質の担保により、実施校を制限している。
- 2) 実施対象校の抱える課題の解決が派遣事業の一環として捉えられている。
- 3) 学校教育における活動では、子供たちの新しい経験の場を作るという観点から独自のプログラムを提供できるアーティストを選定している。

コーディネーターは学校現場とアーティストの双方を理解し、その情報を把握した上で、独自の判断基準を有していることが示唆された。

【参考文献】

- 1) 岡田悠佑, 友添秀則, 深見英一郎, 吉永武史, 根本想(2018)日本におけるオリンピック・パラリンピック教育の促進方法に関する研究:オリンピック・パラリンピック教育を実施した教員の視点に着目して. 体育学研究 63(2):871-883.
- 2) 河合史菜(2015)小学生を対象としたダンス・ワークショップに関する一考察-進行者に着目して-. 長崎大学教育学部紀要 55:111-124.